

COP30 報告書

UNFCCC COP30
2025.11.9~2025.11.22
Belem, Brazil



ユースが見た
国連気候変動交渉の最前線



青年環境NGO
Climate Youth Japan

TABLE OF CONTENTS

Climate Youth Japanの紹介....3

- What is CYJ?
- Departments of CYJ
- 本報告書について
- COP30派遣メンバー紹介

COP30/COY20について.....7

- COP/COYとは？
- CYJがCOPに参加する意義

COP30の論点と結果.....9

- Just Transition
- Adaptation
- TFFF
- NDC
- Mutirao Decision



COP30の会場の入り口の様子

COY20/COP30での活動.....11

- Sustaining Youth and NGO actions(COY20)
- What is the Global Stocktake and Enhanced Transparency framework?(COY20)
- Japan Pavilion
- Children & Youth Pavilion
- Youngo Policy Belief
- SDGs Pavilion
- 環境シナジの推進トリプル・プラネタリー・クライシスの統合的アプローチ
- STUF United Pavilion
- Japan Pavilion
- パビリオン見学
- SNSを通じた発信

派遣メンバーの学び&感想.....27

- 和田優希
- 辻田創
- 井艸駿太
- 田所春乃
- 北川諒
- 安次嶺緑子
- 富田凜太郎

終わりに.....41

- 参考文献
- 編集後記

Climate Youth Japanの紹介

What is CYJ?

Climate Youth Japan(CYJ)は2010年春、気候変動問題に高い関心を持って活動しているユースによって設立されたネットワーク型NGO。2025年度は、日本を中心に世界から集まった約50名のメンバーがオンラインで活動しており、年に数回の対面ミーティングや合宿を開催している。

Departments of CYJ

下の図のようにCYJの活動は大きく「政策提言部門」と「ユース参画部門」に分けられる。政策提言部門では自然科学と社会科学の定期勉強会を土台にした上で、2025年度は「エネルギー政策」と「AFOLU政策」をメインに活動している。ユース参画部門では「Youth council」「LCOY」の2つを軸に活動中。気候変動分野でのユースの活動の幅を広げることを目的にプロジェクトを実施。アドボカシーを行うユースの規模拡大のための環境教育・イベント企画に取り組む。



CYJ運営体制図

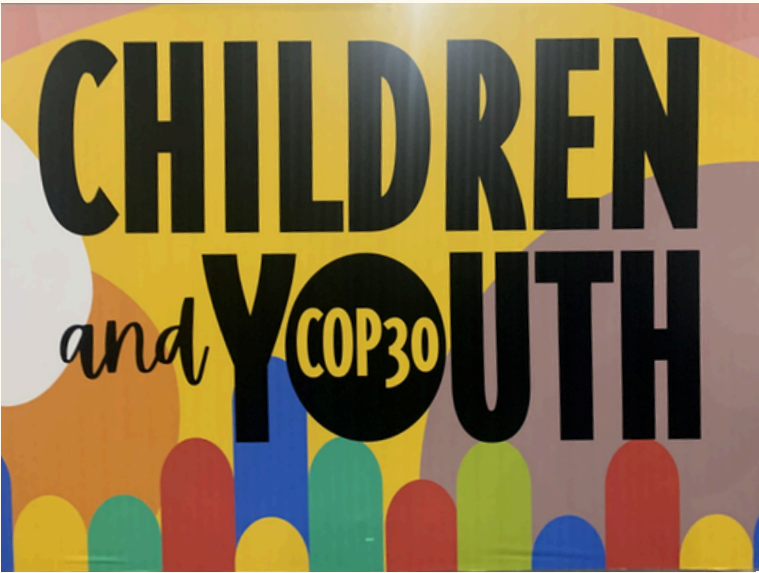
本報告書について

今年のCOP30は、世界の熱帯雨林の30%を有するアマゾンの玄関口ベレンで開催された。森林保全のための新たな資金メカニズム「熱帯雨林フォーエバーファシリティ（TFFF）」の設立や、パリ協定締結から10年を経て計画から「実行」へ移行するフェーズ、さらには科学的証拠を軽視する社会情勢や多様な先住民を有する開催国ブラジルといった地理的背景に基づいて、本会議は「森林」「実装」「真実」のCOPと位置づけられた。こうした国際的な背景のもと、CYJは今年度、活動方針を大きく転換しつつある。従来の政策提言に加え、企業と連携した万博イベントの主催、シンクタンク事業への運営協力、著名な海外アーティストの日本公演における広報連携など、実社会への具体的な介入、すなわち「実装」を志向した活動を多角的に展開した。

「提言」から「実装」へと活動領域を拡大する過渡期にある我々にとって、本COP30は来年度以降の体制強化に向けた実務的なステップとなった。具体的には、組織変革を担うコアメンバーの育成や、多様なステークホルダーとの協業体制の構築において、不可欠な機会として機能したといえる。現地ではCOYでのイベント主催や高官級サイドイベントへの登壇を通じ、CYJのプレゼンス向上と社会的要請の高まりを確かなものとした。一方で、COP参加における構造的な課題も可視化され、COP31以降の活動戦略に反映すべき視座が得られた。気候変動問題において国際交渉への関わりを「参加」から実効性のある「参画」へと進めるため、本報告書をもってCYJの取り組みと若者がCOPに関与する意義を提示する。(井 艸)



現地の市街地の様子



Children & Youth Pavilionの鮮やかな壁

COP30 派遣メンバー紹介

1週目！



名前：和田優希
所属：南気象予報士事務所
一言：次の一步を考える機会に



名前：辻田創
所属：外資系IT企業、ロンドン大学(CS)
一言：実装のCOP！



名前：井艸駿太
所属：北海道大学理学部物理学科4年
一言：COPは教育的価値を持つ



名前：富田凜太郎
所属：気候変動分野に関するコンサルティング企業
一言：責任を持つ側に足を踏み入れた実感

2週目！



名前：北川諒
所属：一橋大学経済学部4年
一言：「あなたはどっち？」を問われる



名前：田所春乃
所属：オハイオ・ウェズリアン大学
環境科学部3年
一言：ユースの役割を再認識！



名前：安次嶺頼子
所属：シンガポール国立大学 環境学科2年
一言：難しいからこそ、関わり続ける



COP30 プレナリーホール

COPについて

COPとは？

COP（気候変動枠組条約締約国会議）とは、1992年に採択された「国連気候変動枠組条約（UNFCCC）」に基づき開催される国際会議である。UNFCCCは、気候変動を人類共通の課題として国際的に取り組むための枠組みを定めたもので、現在194か国・地域が締結している。COPには条約に加盟する国・地域が毎年参加し、地球温暖化対策を総合的に協議する。

会議では、パリ協定の実施状況の確認、新たな気候目標の設定、途上国への資金支援、適応策の強化、そして深刻化する損失と損害（Loss & Damage）への対応など、気候危機克服に向けた主要課題が議論される。各国が共通の理解を深め、協調しながら具体的な行動を決定する場として、国際的な気候ガバナンスの中心的役割を果たしている。

COYとは？

COY（Conference of Youth）は、UNFCCC公式ユース組織「YOUNGO」が主催し、COP直前に開催される若者のための国際会議である。本会議では、世界中の若者が集い、ワークショップを通じた知識共有やネットワーキング、閉会式では各国のLCOY（Local Conference of Youth）から提出されたNational Youth Statementがまとめられ、Global Youth StatementとしてUNFCCCに提出される。このGlobal Youth Statementは、国際的な気候変動対策に次世代の声を反映させる重要な役割を担っている。



COYには世界各国から若者が参加する



CYJがCOPに参加する意義

本年度CYJががCOPに参加する理由としてCOP派遣に人材育成的価値を持たせることと、次年度以降の政策提言から踏み込んだ活動実施のための基盤作りの2点を掲げた。

1、人材育成的価値

国際的な場で自分の立場を客観視し、気候変動問題のどの分野・役割で貢献したいかを考えるきっかけにする。

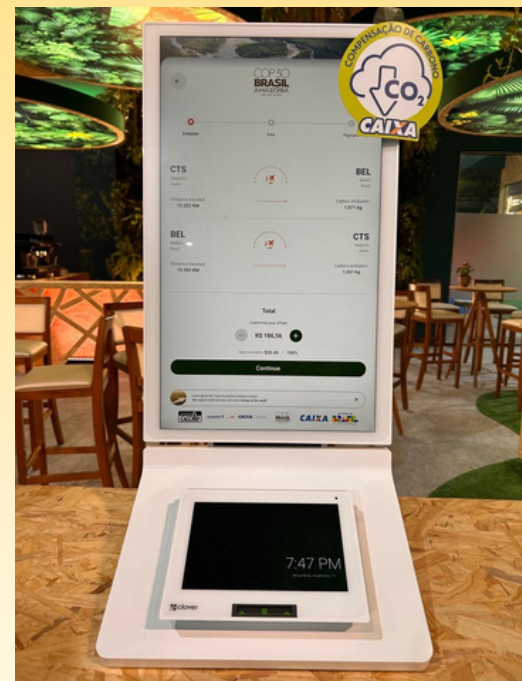
CYJ及びCOPを、“自分の研究・人生・地球社会”をつなぎ直すための鏡にする。CYJは、単に気候変動問題の「発信」や国際交渉への「参加」だけでなく、若者が成長し、社会的リーダーとして自立していく場をつくることも目的にしている。したがって、個人の成長・自己発見を目的としてCOPに参加することで、COP派遣に組織の理念に沿った“人材育成的価値”をもたせる。

2、政策提言から踏み込んだ活動実施のための基盤作り

来年度以降CYJは、政策提言だけでなく、具体的な社会実装アイデアを検討・実施している。COP30で出会う世界中のユースや研究者、企業関係者、政府関係者と協働して、来年度以降のプラクティカルなアクションに繋げていく。

ちょっと一息 コラム

Green Zoneにカーボンのクレジットを買える機械がありました。ブラジルに来るまでの経路を入力すると、飛行機で使ったカーボンの量と、それを相殺するための値段が表示されました。ちなみに日本（新千歳空港）からブラジル（ベレン国際空港）までは5000円ぐらいでした。40時間かかる旅程で、飛行機に乗っている時間も長かったのもっと高いと思っていたので少し驚きました。（和田）



COP30の論点と結果

COP30はNatureCOP、Implemation COPなどと言われるほど、様々な論点が注目されていた。ここでは、主な論点について、COP30を通じた結果を報告する。

Just Transition

COP30では、気候変動対策に伴う経済・社会の移行を公平かつ包摂的に進める「Just Transition（公正な移行）」が重要な議題として取り上げられた。最終合意文書（Belém Political Package）には、移行過程で労働者や地域コミュニティが不利益を被らないよう支援する方針が明記され、特に発展途上国への資金支援や技術移転を通じた支援の強化が重視された。また、適応ファイナンスの拡充により、移行期における社会的セーフティネットの強化も認められた。一方で、化石燃料の段階的廃止を促す具体的なロードマップは採択されず、脱炭素移行を進める際の実務的な設計や資金配分の透明性には課題が残った。そのため、Just Transitionの理念は国際的な合意として確認されたものの、具体的な行動に移すための実装面では依然として不確実性が存在する。COP30の成果は、単なる温室効果ガス削減や再生可能エネルギー導入にとどまらず、人々や地域社会の公平性を考慮した政策設計が必要であることを国際的に明文化した点で意義がある。今後の交渉や各国の実施計画、資金供与、法整備を通じて、Just Transitionの理念を実質的な行動に落とし込むことが求められる。（田所）

Adaptation

パリ協定において、気候変動における各国の脆弱性低減とレジリエンス強化を目的に、適応に関する世界全体の目標（GGA: Global Goal on Adaptation）が設けられた。このGGAの具体的な指標策定は、COP28から本格的に交渉が始まった。当初、専門家が提案した指標の数は膨大で、全9,529項目あったが、今年6月に行われたSBで100項目の指標リストへまとめられた。COP30ではこの指標リストに関して、仕上げを行うための議論が交わされた。結果的に、各国の適応進展を測るための指標が59項目に絞られ、正式に合意された。これにより、各国が共通の基準で適応行動を評価する枠組みが整い、実施段階に向けた重要な土台が築かれた。一方で、指標の運用には資金・技術・能力構築などの実施手段が不可欠であり、その確保は今後の課題として残された。資金面では、2035年までに適応資金を3倍に増やす努力目標が示され、途上国支援の拡大に向けた合意が形成された。しかし、具体的な金額、拠出国の責任、タイムラインは明確化されず、依然として大きな資金ギャップが存在する。以上から、COP30は適応の枠組みづくりに進展をもたらした一方、実効性を伴う資金拡充は今後の交渉に委ねられる形となった。（和田）

TFFF

ブラジル政府の今年のCOPの注力事項の一つであるTorropical Forest Forever Fund、通称TFFF（熱帯雨林フォーエバーファシリテーター）は熱帯雨林の保護、保全、維持を目的とした気候基金である。その大きな特徴はなんと言っても公的資金と民官資金を組み合わせたブレンデッドファイナンスであるという点だ。ブラジル政府は公的機関から250億米ドル、民間機関から1000億米ドル、合計で1250億米ドルの基金の立ち上げを計画している。実現すれば、史上最大の気候基金となる。COP30の数日前に行われるリーダーズサミットの1日目にブラジル政府はTFFFの設立を宣言した。多くの国がTFFFの支持を表明した一方で、資金の拠出を確約した国は少なく、目標とする250億米ドルには届かない50億米ドルからのスタートとなった。TFFFは従来の気候資金と異なり、森林の持つ様々な側面に価値をあたえている。ブラジル政府はTFFFを皮切りに、UNFCCCにCBD、CCDも含めたりオ条約のシナジーを強調していた。（井艸）

NDC

NDC Presidency Consultationの交渉では、本来NDCやETFの技術的議題のはずが、各国の発言は9.1条、具体的には先進国による資金の提供義務に集中していた。多くの途上国のNDCは「必要な資金提供がある前提」という条件付きのNDCが大部分を占め、資金提供なしには実行できない「構造的なギャップ」が強調され、論点はやはり9.1条の十分な議論の必要性だった。多くの先進国は11/13時点では9.1条の重要性は理解しつつも単独の議題にすることには慎重で、NCQGの既存の枠内で議論すべきということで合意には至らなかった。議長は、パリ協定の既存の仕組みを壊さず、国を名指しで批判しないように呼びかけながら橋渡しとしての立場を模索していた。（辻田）

Mutirao Dcision

Mutirao Decision（ムチラオは「共同作業・共に働く」の意味）はCOP30全体の包括的決定（Cover Decision）であり、政治的な方向性を示す文書である。この中には、緩和や資金といった分野を横断した幅広い内容が盛り込まれた。具体的には、COP30・COP31議長国の下、パリ協定の実施家族、1.5度目標達成のための国際協力強化、および各国のNDC・NAP実施支援を目的とした協力的・促進的・自発的なイニシアチブである「Global Implementation Accelrator」の立ち上げを決定した。また、COP29合意のNCQGの実施を議論するハイレベル閣僚級ラウンドテーブルの開催や、気候変動に関する一方的な貿易制限的措置貿易の役割に関する国際協力強化の機会、課題、障壁を検討するため、2028年にはハイレベルイベントの開催も併せて決まった。（北川）

COY20/COP30での活動

まずは、COPの直前に開催されたCOY20でのセッションの様子を2つ紹介する。

COY20: Sustaining Youth and NGO actions ~Funding and Capacity Building for long-term impact~

今年はCYJとして初めて、COYでセッションを開催することができた。

私は、今年からCYJの会計統括となり、助成金の応募や申請、予算のやり繰りを経験した。CYJの活動では、気候変動、政策、国際交渉等の勉強会をもとにした政策提言活動、COP派遣が当初から続けられてきたが、こういった活動のほとんど



登壇してくれたYPFP アイリスとCYJメンバー

は学生や社会人メンバーがボランティアとして取り組んできた。学業との両立でも難しい上、金銭的なインセンティブの発生しない活動では、コンスタントに活動に取り組む人が限られている。CYJ内でも金銭的補助を受けられるCOP派遣者や活動歴の長い運営チーム、一部の意欲のある人たちのみがアクティブメンバーであるため、その人数は少ない。

これらの経験から、若者の団体が抱える恒常的な課題として、

- 1) 金銭的インセンティブの欠落
 - 2) 恒久的な資金源の不足
 - 3) リソース不足によるプレゼンス低減
- 等があると考えた。

そこで、各国の若者団体がどのように少ないリソースの中でもインパクトを発揮しているのかを検証するために今回のセッションでは、youth & financeというテーマで団体の持続可能性について、海外の若者団体から数名を招きパネルディスカッションを行った。

COY20の直前にセッションの主催許可が降りたので、準備期間はわずかに3週間程度だったが、海外ユースに声をかけたところ、幾つもの登壇への応募があり、海外ユースのこのトピックに対する関心の高さが伝わった。最終的にはASEAN地域から国際組織で勤務しているユースが1名、一昨年のCOPの開催国UAEから先住民に関する教育系NGOのfounderが1名、各国に支部をもつ若者団体からアメリカのユースが1名、現地ブラジルの公共政策を専門とするユースが1名(当日不参加)の構成でパネルディスカッションを行うことになった。

セッションは以下の3つのテーマに沿って進めた。

- ① 活動内容と資金の使い道
- ② 資金獲得方法
- ③ 限られたリソースでインパクトを出す方法

今回は日本のユースである私視点で興味深かったものを紹介する。

まず、NGO/NPOが抱える資金獲得のジレンマである。NGOが直接資金を得る方法は、パネルディスカッションに参加したどの団体でも同じく会員からの入会金、年間費等であった。これはCYJも同様である。では、どのようにCOP派遣のための資金を獲得しているかという補助金である。補助金は会員費からは得られない巨額の資金を獲得でき、活動の大きな助けとなる。一方で、その獲得にはかなりの労力と時間が使われ、ただでさえ時間のない若者にとってはもったいなく感じられる。また、応募したとしても獲得できない可能性もあり、過度に助成金に頼った活動を続けていると、助成金を獲得できなくなった途端に団体としての力が失われてしまう。ASEANユースはこれらを解消する手段としてプロダクトやサービスの提供を挙げた。一方で、CYJを含めたNGO・NPO等は、利益が目的の活動ではないためにこうしたプロダクト・サービスの提供は団体の存在意義と相容れなかったり、商品自体の利益面での価値は薄いことがあったりする。こうした中で、どの国の団体も常に資金繰りを模索していることがわかった。

続いて、ユースというポジションのもつインパクトについてである。各国のユースから出た意見とセッションを通して感じたことをまとめると、ネットワーキングの強さ、ビジョンの合致、バックグラウンドの多様性である。まずネットワーキングの強さ、それは、ユースがある種「教えられる／失敗が許される」立場にあることに起因する。なんらしがらみを持たず拘束をされないユースはネットワーキングにおいて無類の強さを誇る。企業、非営利組織、教育・研究機関、政府等どの立場の人に対しても交渉を持ちかけることができる。



セッションの様子

次にビジョンの合致について、ユースにとって気候変動は統一的な問題意識として存在し、国や地域によらない。国境を超えるユースという共通点が未来への危機感という観念を通じてバックグラウンドによらず気候変動の解決という目標を共有する。最後にバックグラウンドの多様性は、COYに参加して強く感じた。高校生から社会人、アジアから南米、アクティビストからPhDまでさまざまなバックグラウンドから若者が集まることで、まさにユース版のCOPというにふさわしいものであった。気候変動によって発生する災害による恐怖心、解決の見通せない無力感から気候不安という言葉が最近では使われるようになった。特にユースが各自の国にいるときには、孤独感等も感じることもあったかもしれないが、COY会場では少なくとも不安ではなく楽しさと一体感があったと思う。(井艸)

COY20/COP30での活動

COY20: 「What is the Global Stocktake and Enhanced Transparency Framework?」

2025年COP30に合わせて開催された「What is the Global Stocktake and Enhanced Transparency Framework?」セッションをCOY20で開催した。約20か国から50～60名が参加し、国際色豊かな交流が実現した。

冒頭では参加者同士の自己紹介とアイスブレイクを兼ねたチーム対抗クイズ大会が行われ、会場は大いに盛り上がった。クイズでは、パリ協定のグローバル・ストックテイク(GST)や透明性強化枠組み(ETF)など、気候変動対策の国際的な最新トピックが出題され、参加者は知識を競い合いながら理解を深めた。

本セッションの前半では、GSTの意義や仕組みについて解説をした。GSTは、各国が5年ごとに気候変動対策の進捗を総括的に評価し、パリ協定の長期目標達成に向けてNDC(国が決定する貢献)の引き上げを促す重要な仕組みである。また、ETFは、全ての締約国が2年ごとに温室効果ガス排出量やNDCの進捗、適応策、気候資金などを報告し、技術レビューや多国間議論を通して透明性と相互信頼を高める枠組みであることを強調した。特に、開発途上国にとっては技術的・財政的な課題もある一方で、国際的な支援や制度強化の機会となる点も議論した。参加者同士の活発な意見交換やクイズを通じて、GSTやETFの重要性、そして国際協力の必要性についての理解が深まった。今回のセッションは、多様な国・地域の参加者が一堂に会し、知識と経験を共有する貴重な機会となった。



ここからは、COP30にて参加したセッションや会議の様子を紹介する。

Japan Pavilion

今回のセッションでは、「国内外の大学間連携をどのように強化し、若者が学びを社会実装へつなげられる仕組みをどう構築するか」というテーマで発表した。私はこれまで、模擬国連、海外インターンシップ事業、LCOY、ユース団体立ち上げなど、多様なプロジェクトに関わってきた。その経験から、大学や若者同士が連携する際に重要なのは“座学と実践を往復できるプラットフォーム”をつくることだと強調した。

具体的には、模擬国連×クリーンナップのように政策議論とフィールドアクションを組み合わせる仕組み、ドバイ万博インターン×MBAやスタートアップ訪問プログラムのように国際経験とビジネス教育を接続する取り組み、さらにLCOYやAPYE、CWMUN、アースデイ東京Global Summitのように、国内外の若者が協働して社会課題解決を実践するプロジェクトを紹介した。これらは、単なる交換留学ではなく、大学の外に広がる国際プロフェッショナルネットワークと学生をつなぐ“実践の連携”が重要であるということだ。

また、「若者・学生は大学にどんな変革を求めているか?」という問いに対しては、知識の習得だけではなく、学んだ内容を社会で試す“実験フィールド”の提供を求めていることを強調した。私自身、ロンドン大学(コンピュータサイエンス)での学びを通して、英語×CSという専門性を磨きつつ、イベント全体の炭素会計(GHG測定・削減計画)を担い、さらに将来的な起業につながる「GX人材育成プログラム(GX Youth Education Program 仮)」の企画にも関わっている。

こうした「学び→実践→改善」の循環は、大学が単独で構築することは難しく、国内外の大学、企業、自治体、国際機関、ユース団体が連携して初めて可能になる。私は今回のプレゼンで、大学間連携を“単位互換”や“交換留学”にとどめるのではなく、学生が卒業後も継続して取り組める長期プロジェクトとして設計する重要性を提案した。学生が実社会の課題に対して責任を持ち、成果を示せる場が必要であると考えている。

今回の発表を通じて、大学の役割は“知識を提供する場”から“未来のチェンジメーカーを育成し社会に送り出すハブ”へと変化していくべきだと考えている。(辻田)



Children & Youth Pavilion

香港のユース団体(CarbonCare InnoLab)が主催する「Youth Voices on Energy Equity for Climate Resilience: Upholding Human Rights in Adaptation」というセッションに登壇した。形式はパネル

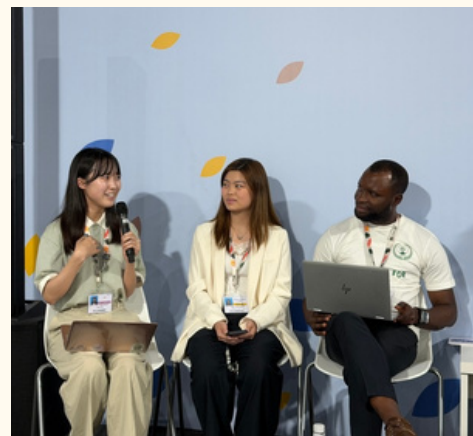
ディスカッションで、「エネルギーへの公平なアクセスがないと、どんな人権侵害が起き、どんな脆弱性(レジリエンスの不足)が生まれるのか?」「自分が日本の気候変動適応計画を作り直せるなら、エネルギーの公平性を高めるために何を最優先で入れるか?そして、なぜ若者の視点が重要な

のか?」「クリーンエネルギーへの移行、または移行不足によって不当に影響を受けている人々の人権を守るために、政府や企業が今すぐ取るべき具体的な行動は何か?」というような問いが投げかけられた。私は、エネルギー移行を行なっていくときに、移行先(再エネの安定供給)が完全には整っていない状態で移行だけを促進する(ガソリン価格を値上げするなど)のはエネルギーを使える人と使えない人の格差を大きくすることに繋がってしまうのではないかと懸念していることに言及した。また、再エネの安定供給を進めるために、蓄電技術の一種である水素発電の研究開発に着目しているということも述べた。エネルギーは基本的な生活するのに欠かせないものであり、たとえ環境負荷が低くても、経済的に余裕のある人などしかアクセスできないものであってはならない。気候変動問題解決の一策として掲げられているエネルギー移行において、まずは土台を整えて、誰も取り残さないような移行を進めてほしいと考える。他のユースは、エネルギーへの公平なアクセスに関して、エアコンの



セッション参加者と共に(左端が和田)

普及に言及し、夏の猛暑に対する適応をどのように進めていくべきかなどを話していた。自分自身、最近一人暮らしをし始めて、生活に必要な電気やガス代を自分で支払うようになったことから、エネルギー価格などに関してより身近に感じるようになった。そのことも相まって今回のセッションは非常に考えさせられるものとなった。クリーンエネルギーへの移行は欠かせないが、それを促進させるための圧力のかけ方はよく考えなければならないと感じる。(和田)



セッションの様子

Children & Youth Pavilion

Children & Youth Pavilionで開催された。“Global South to North: Youth Led Community Innovation Tackling Climate Change”というトークセッションに、ザンビア出身で起業家かつYOUNGOのファイナンス部門のFocal PointであるPatricia Longwani氏(中央)とガンビア出身でClimate AdovocatorのHaddijatou Ceesay氏(右)とともに登壇した。

Patricia氏からは、自身が起業した会社の製品である、AI搭載のコンポストについても紹介された。このコンポストは、家屋の屋根に設置した太陽光の電力を用いて、自動制御でコンポスト内の温度や湿度の環境調整をして農業肥料を作るものであった。トークセッションの中では、途上国の農業・エネルギーに係る課題と先進国の遠隔・過疎地域で共通する課題についても議論が及んだ。日本でも地方では災害時の電力供給の断絶を防ぐ観点などから域内で電力を



チルドレン&ユースパビリオン登壇者と共に

自給自足にする必要性が訴えられている。ただ、旧来からの電力システムやインフラの規制が強い先進国では革新的なアイデアによる事例を積み重ねることの難しさがある。一方、途上国では小規模かつ革新的な事例が多数生まれており、Southから優良事例を学ぶ必要性を認識した。このトークセッションではNorthからSouthへの資金の提供・技術支援とは違った新しい協力の形の萌芽が見られた。私は、JICAが行なっているアフリカ地域の起業育成プロジェクト“Project NINJA”について紹介した。エネルギーやサステナビリティ分野の起業家の育成・若者の就労機会の確保につながるものだ。このプロジェクトはアフリカの広範な地域で多数の協力事業があるものの登壇者・オーディエンスからの認知度は高くなく、日本が主導しているプロジェクトによる途上国との関係の深化とともに、取り組みの周知を通じて日本の途上国協力・支援への理解を広げつ必要性があると痛感した。(北川)

ちょっと一息 コラム

シンガポールパビリオンでは、例年下水から作ったビールが無料で配布されています。このビールはCOPでしか飲むことができないらしく、大変おいしいです!COPに行った際は、1日の終わりにシンガポールパビリオンを覗いてみてはいかがでしょうか。(井艸)



Youngo Policy Belief

13日にYOUNGOのpolicydebriefに参加し、その日の適応交渉の内容を共有した。policy debrief は単に交渉の要点を整理するだけでなく、各国のユースが何を感じ、どのような背景を持つのかを知る場でもある。あるASEAN地域のユースは、自国民の3分の1が洪水被害を受けている現状からLoss & damage の重要性を強く訴えていた。

ブラジルの先住民に関わるユースは、国内で先住民の意見が十分に尊重されず、強硬な手段を取らざるを得ない状況を語った。

日本にいと伝わりづらい政治や民族の複雑さを目の当たりにし、自分の視点の狭さにも気づかされた。私は先進国・途上国間の溝という一般的な構図しか指摘できなかったが、それでも他国の切実な声を聞くことで、日本のユースとしてどこに立つべきか考えるきっかけになった。(井艸)



policy debriefの様子

ちょっと一息 コラム

UNFCCC パビリオンで開催されたClimate Data Hubのローンチセッションに参加した。デジタル技術と国際政策が融合する場だった。

Microsoft Chief Sustainability Officer のMelanie Nakagawa氏との再会も重なり、各国の気候変動政策や資金支援の意思決定を支えるAIとデータの力を実感した。Climate Data Hubとは、国連、EY、NEDAMCO Africaとの連携により、気候資金の動きやNDC、BTRデータが統合され、透明性と実効性を備えた新たなプラットフォームだ。今後より多くの国や関係者がこの基盤を活用し、持続可能な変化を生み出すことが期待される。(辻田)



Microsoft CSOメラニー氏と

SDGs Pavilion

~Bottom-up Localization of SDGs for Net-Positive Society-building~

13日は、今年のCOPの舞台がアマゾであることを踏まえ、TFFF等とも親和性が高いNature based Solutionsにおける日本の取り組みを紹介した。具体的には、日本における里山・里海といった伝統的な取り組みが気候変動対策にも取り込める可能性があることを示した。里山・里海の取り組みは、GHG削減だけではなく、人間と自然の共生の形であると主張した。また、カーボンニュートラルやネットゼロの発展的な概念であるnet positiveを取り上げた。ネットポジティブとは、人類の活動によって失われた自然を再生したり、well-beingな生活に更新したりすることである。この観点から、地域のNPOと協働する若者の森林教育の取り組みを紹介した。(井艸)

NGOに所属するユースが外部人材として小中学校などで環境教育をしていくことや、その影響について考えられることを述べた。私自身も、これまでに学校講演などで環境教育に携わったことがある。その経験から、どういう結果が得られたかなどを共有した。実際の教育現場では、教員のキャパシティが足りていなかったり、具体的にカリキュラムに入れ込むには様々な制約があったりする。そのため、外部人材として総合の時間などで講演を行うことで教育現場に負荷をかけることなく実施ができるということ述べた。(和田)

国際テーマを地方の学生にどう橋渡しできるかについて発表した。紹介した事例は私が立ち上げたアースデイ東京ユースが開催した「SDGs Award 2022」だ。全国10団体・130名超の高校生/大学生が参加し、専門家5回講義、学校・家族を巻き込むフィールドワーク、ファンイベント企画、最終プレゼンを実施。リフィルSNSは3か月で512投稿。優勝は新潟の高校生団体だった。オンラインで繋がり、団体間で高めあうことで国際テーマを楽しく身近に感じられる取組みであった。(辻田)



登壇者の集合写真



発表の様子

COY20/COP30での活動

SDGs Pavilion

~Regenerating the World through Business Innovation~

14日は、衛星データ関連のスタートアップに携わった経験から、気候危機が新たなビジネスを生む可能性と、環境意識やAIに強い若者がその担い手になり得ることを述べた。社会が若者の挑戦を支える基盤の必要性も強調した。(井艸)



発表の様子

気候変動問題に対して、気象予報士としてできるアプローチ方法を述べた。気象予報士は、気象のデータを解析して現象を予測した上で相手に伝えるというサイエンスコミュニケーターのような役割を担っている。気象災害から人々の身を守るための仕事であり、これは今後気候変動によって異常気象が甚大化していく可能性に対して「適応策」となる。一方で、身近な気象が気候変動問題と結びついていることを説明できる立場でもあり、人々へ行動変容を促すことができれば「緩和策」にも関わることができる。このよう、に気象予報士は気候変動問題の解決に向けて貢献できるポテンシャルが大きいということを述べた上で、日本が持つ気象予報技術を他国へ移転していくことの重要性についても触れた。(和田)



登壇者の集合写真

公式サイドイベント

**「環境シナジーの推進トリプル・プラネタリー・クライシスへの
統合的アプローチ — COP30からUNEA-7、その先へ」**

15日、COP30の公式サイドイベント「環境シナジーの推進：トリプル・プラネタリー・クライシスへの統合的アプローチCOP30からUNEA-7、その先へ」に参加した。



集合写真

(左からJun氏、土居氏、Berger氏、Sengupta氏、渡辺氏、Drewell氏、田所、Stormyr氏、見宮氏、藤野氏)

本イベントは、気候変動・生物多様性損失・汚染という三つの危機を統合的に扱う必要性を再確認し、U N E A - 6 のシナジー決議を踏まえて具体的な協働のあり方を議論するための場として設定されていた。Y o u t h 代表として、若者が政策形成やコミュニティの現場にどのように貢献できるかという視点を共有した。また質疑の時間に、Y o u t h が各ステークホルダーとどのように連携し、実際のシナジー形成に関わることができるのかを質問することができた。専門家や機関の代表者が若者の参画を積極的に歓迎していたことが印象的で、自分自身が国際的な議論にどう関わっていくべきかを考える大きなきっかけとなった。今回のセッションを通じ、シナジーという概念が理念にとどまらず、政策・金融・企業・市民社会の間で具体的な協働の形として広がっていることを実感した。トリプル・プラネタリー・クライシスの解決には、断片化したアプローチを超えて、多様な主体が共通の方向性を持つことが不可欠である。Y o u t h として、今後も主体的に関わりながら、自国と国際社会の双方に貢献できる立場を模索していきたいと感じた。（田所）

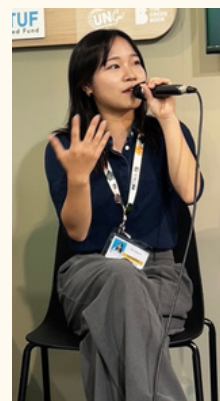
STUF United Pavilion: Rebuilding After Disaster with Adaptation

20日、COP30のSTUF United Pavilionにおいて、「Rebuilding After Disaster with Adaptation:ローカルの経験から考える災害後復興と適応」と題したセッションが開催された。

本セッションでは、2025年に台湾で発生した大規模土砂災害を契機として、「災害後の復興をいかに将来のレジリエンス向上につなげるか」をテーマに、台湾、ブラジル、フィリピン、日本の若手がそれぞれの経験や課題を共有し、活発な議論を行った。



イベントの様子



発表の様子

安次嶺は日本の防災文化について、「地震が多い日本では、防災教育や訓練が日常生活に根付いており、その積み重ねが災害時の不安を軽減する力になっている」と述べた。災害そのものを完全に防ぐことはできないが、知識と訓練は人やコミュニティを強くする。このような“ソフトな備え”の重要性が、参加者に強く印象づけられたセッションであった。(安次嶺)

ちょっと一息 コラム

IGESの藤野さんの紹介で、IPCCの副議長であるDiana氏にお会いする機会がありました。副議長という立場にもかかわらず、Youthの活動に熱心に関心を寄せてくださり、SNSを得意とする若者を通じて、IPCCの報告書など一見難解な内容も手に取りやすく情報発信してほしいとアドバイスをいただきました。(田所)



CYJメンバーとIPCCメンバーの
集合写真

Japan Pavilion

17日にJapanパビリオンの「Accelerating Synergistic Solutions to the Triple Planetary Crisis -The Power of Business」(日本環境省主催)に登壇した。今回のイベントでは、Sompo Japan、FRUTA FRUTA、O2Farmの3社から、シナジーをどのように事業として実装しているのか、非常に具体的で実践的な取り組みが共有された。政策だけでなく、ビジネスの現場でシナジーが確かに“動いている”ことを実感できる時間だった。

私はコメントの中で、1.3兆ドル規模の目標を動かすにはシナジーが不可欠であり、しかし実行段階で大きな判断を下すのは若者には簡単ではないこと、それでも実装の結果に最も影響を受けるのは私たち自身であることを伝えた。だからこそ若者も積極的に関わるべきであり、Implementationのフェーズでは、大人世代が実務的な知見を、若者が危機感と行動力を持ち寄ることで、より大きな変化が生み出せると強く感じた。(田所)



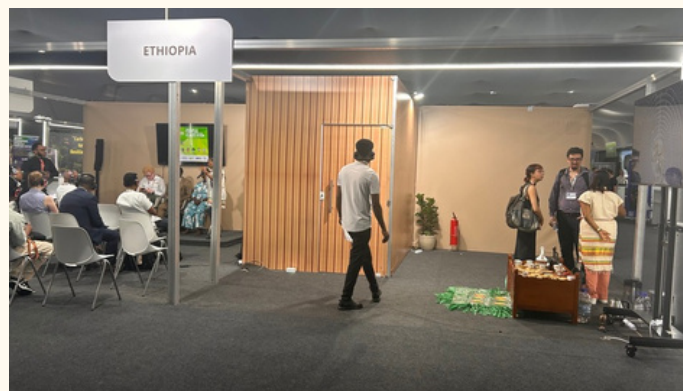
集合写真 (左端が田所)

COY20/COP30での活動

Pavilion見学を通して

交渉やセッションへの登壇の合間には、各国のパビリオンを見て回った。COP29にも参加した身としては、去年と比べて、展示が充実しているパビリオンが圧倒的に減ったと感じた。また、多くのパビリオンがCOPが始まるまでに準備が間に合っていなかった。去年は多くの国が、自国での気候変動対策や環境問題に関する取り組みを壁いっぱいを使って展示がしてあり、その国の方から説明を受けることができた。文化交流の文脈も強く、自国の特産品などを提供したり体験コーナーが設けてあったりするようなパビリオンも多くて非常に充実していたことが印象的だった。しかし今年は椅子とモニターが置いてあってセッションが開催されるだけの場になっているパビリオンも多く、正直残念に感じた。セッションは展示と比べてコンスタントに見て回ることが難しいため、今年は広く情報収集をするのには向いていないように感じた。

それでも各国のパビリオンを通して、世界の取り組みや人々との交流をすることができた。ここでは、派遣メンバーの中で特に印象に残っているパビリオンをいくつか紹介する。(和田)



ちょっと一息 コラム

様々な技術展示があった日本パビリオン。中でも人目を引いていたのが衛星システムGOSAT(温室効果ガス観測衛星)。世界各国の二酸化炭素とメタンの排出量を年代を遡って観察することが可能。ついつい触りたくくなるような見た目とガジェットの操作性の良さから海外の参加者が続々と訪れていました。世界に誇る日本の衛星技術に要注目!!(北川)



Japan Pavilion

日本パビリオンには、企業が自社技術を紹介する展示が並び、模型や体験設備が六つほど設置されていた。奥には小規模なセッション会場もあり、日本人の来訪者が特に多かったのが印象的だった。企業の担当者に話を聞くと技術は興味深いものが多かったが、その内容が複雑で、同じ日本人の自分でも理解に苦労する部分があった。周りの海外来場者も首をかしげている様子が見られた。時間が限られていたため深く聞けなかったが、帰国後に改めて企業に連絡を取り、詳しく話を聞くつもりだ。(井艸)



Germany Pavilion

ドイツのパビリオンにて、「気候変動研究における国際協力：データ、信頼、変革の勢いを築く」というテーマのもと、ブラジルCOP議長国の指針である「グローバル・ムチラオン(Mutirão)」に焦点を当て、国際協力の成功例や異なる状況での課題が紹介された。二国間から地域的、さらにはグローバル規模まで、さまざまな協力戦略や形式が取り上げられ、それらに関わった人たちも登壇していた。登壇のあと、登壇者は聴衆とグループに分かれてディスカッションを行う時間があり、立場に関係なく意見を交わせる素敵な場だと感じた。(田所)



COY20/COP30での活動

South Korea Pavilion

韓国は化石燃料由来の火力発電の2040年までに41基停止することを公表し、脱石炭同盟への参加を表明。アジアの中でも脱化石燃料に踏み出した国として強いインパクトを残した。その韓国パビリオンでは、下水道システムについての技術を紹介するパンフレットなどが展示されていた。資料の説明はQRコードの読み取り形式。



韓国パビリオンにて
韓国以外のアジア・アフリカの方の姿も見られた

パビリオン内は展示物などがなく、すっきりしているが実際の製品や機器を手にとれる日本パビリオンの方が人目を惹く印象だ。製薬・バイオとともに水素を国家の産業戦略の中枢に据えた韓国。“水”の技術でCoalitionを組みながら世界と共同するという強い意志が見られた。(北川)

China Pavilion

パビリオン見学の間に参加した中国セッションでは、CBDR(共通だが差異ある責任)のもと既にサプライチェーン全体の低炭素化を進める中国企業の実行力に驚いた。テンセントの重鎮が国連と協働しデジタル基盤を構築している点、Changan Automobile South America が国際的なカーボンフットプリント手法を提唱していたことも印象的。最大の再エネ発電国である中国と電源構成の9割が再エネのブラジルの連携はかねてからの南南協力の賜物であり今後の国際政治の主導権を握る強さを感じた。(辻田)



アジア開発銀行職員が発言の様子



中国企業による解説スライド

SNSを通じた発信

国内メンバーは5名で活動し、団体のインスタを通してCOP/COYに関する情報発信を行った。派遣前には、「COP/COYとは何か」・「COPの歴史」などCOP/COYについての情報や、派遣メンバーの紹介の投稿を行った。派遣期間中には、派遣メンバーによる現地での活動報告や交渉の様子を発信を行い、総じて21の投稿に対し900を超えるいいねが集まった。派遣者による熱意のこもった現地からの報告、また会場の様子を映した動画を通して、閲覧者に、より臨場感をもってCOPを感じてもらえたのではないかと考えている。今後もCYJとして、COP関連に限らず、より多くの人に、私たちの活動や気候変動に関する正しい情報を届けられるような発信の在り方を探っていききたい。(国内チーム)

COP30 派遣メンバー

和田優希
YUKI WADA

日本の気象予報士として、気候変動適応の分野で他国と協働していく方法を検討する。

気候変動適応
防災と減災
Early Warning System
Global Goals on Adaptation

詳細は本文で！

November

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
26	27	28	29	30	31	1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	1	2	3			

2025

COP30

11月10日より開催

派遣前のメンバー紹介

COPに関する情報発信

11月9日 21:49

開催の様子はこんな感じです！
50-60名が25カ国ぐらゐから参加されました！

Ufpa Belém

YOUTH

climateyouthjapan

Climate Youth Japan

投稿322件 フォロワー177人 フォロー中216人

気候変動問題に大きな関心を持つ若者によって2019年に設立されたNGO団体です。政府や関係省庁への政策提言、国際会議への派遣、若者向けの発信・イベント開催など幅広く活動しています！

linktr.ee/climateyouthjapanと検索

今年度は渡航中にもストーリーや投稿を通して、積極的に活動の様子を発信

派遣メンバーの学び&感想

和田優希

次世代メンバーへのバトンタッチと 今後の軸をより明確にできたCOP

参加した理由

まず、統括としての参加理由は「次世代CYJメンバーの熱量を維持・向上させるため」である。昨年COP29に参加した時、気候変動問題に対して様々な方向から解決に向けて取り組んでいる人々に会った。その時に受けた刺激が、これから先もこの問題に関わっていききたいという気持ちを高めた。今年のCOPは開催地の治安やロジ関連の不安などで何度もCYJとして参加を断念するか否かを検討したが、去年の私のように現地で刺激を受けて今後も長期にわたって気候変動問題に積極的に取り組むユースを増やしたくて遂行を決断した。そして個人としての理由は、「今後日本の気象予報士としてこの問題にどう貢献していけるかを考えるため」である。将来的には気象予報の精度が高くないが故に気象災害の影響を大きく受けているような国への技術移転などに関わりたいと考えている。ネットワーキングをすることで現状を知り、適応交渉を追うことで、自分が目指していることが実行できるような体制（技術移転するための資金、実施モニタリングなど）が整うか、そしてそれに対する他国のモチベーションはどのようなものかを知りたくて参加した。

ユースに伝えたいメッセージ

このような大きな問題に対して心折れることなく取り組み続ける1つのコツは、やはり「人に会うこと」だと思う。私自身、家でニュースやデータを見たり、記事を読んだりしているときは、マイナスな気分になることが多い。失望や呆れ、無力感で逆に腰が重くなることもあるが、そういう時こそシンポジウムやイベント、COPのような国際会議に参加するのが良いと感じる。同じ問題意識を持つ人と会うことで、微々たる力は「無」ではないことに気づける。今年も交渉自体は難航し、新たに様々な課題が見えたCOPとなったが、少なくとも私たちが諦めず歩みを止めないことで国際情勢の背中も押せるのではないかと感じている。

現地での活動

今回は適応議題に焦点を当てて参加したため、YOUNGOのAdaptation Working Group (WG)での活動が軸となった。渡航前のオンライン活動から始まり、現地では毎朝WGメンバーで集まり交渉議題に関しての意見交換や交渉追跡の計画を立てた。交渉を追う中でスタンスに疑問がある国があれば、交渉官と直接話を行うということもしていた。今年この活動をして感じたのが、「交渉を追う」ではなく「交渉に参画する」ことを日本ユースも意識していくべきということだ。

YOUNGOはUNFCCCから公式に認められている唯一のユース組織であり、UNFCCCからユースとしての意見を求められることも多々ある。しかしこれまでYOUNGOに日本から継続的に参画し、最終的なステートメント作成や交渉官との意見交換に関わってきた人はほとんどいない。日本は交渉の場においてスタンスを注目されやすい国でもあり、他国ユースの関心も大きい。そのような中で、日本ユースがYOUNGOのWGにおいて対等にディスカッションに参加することは非常に重要なことだと感じた。

そして、リアルタイムで交渉官にアプローチをしたり、ユース間で意見をまとめて表明したりするのは、やはり現地参加でないと難しいと感じる。そのため今後、COPなどの国際会議に現地参加をする時は、ただ「交渉を追う」だけでなく「交渉に参画する」ことを意識できるような体制を日本ユースの間でも作っていききたい。



今後の活動

今回のCOPでも様々なセッションでEarly Warning System（早期警戒情報）の普及・拡大を進めていきたいという話が上がっていた。自身もその一端を担いたいと思う。衛星データの集約や解析などはもちろん必要となるが、個人的にはそれらの情報を伝達する役割も非常に重要だと考える。情報は、相手を動かす（物理的もしくは心理的に）ものでないと、情報の意味がほとんどなくなるからだ。私は現在日本で気象予報業務に携わっているが、単に「明日雨が降るかどうか」を予報するのではなく、「この雨は、どういう人が、どういうことに気を付けるべきか」などを分析して、相手に伝わる表現で解説することを毎日訓練している。気候変動の影響で異常気象の頻度や強度が増している中、元々自然災害の多い日本だからこそ持っている高い気象予報技術、情報の伝え方をしっかり学び、それを他の国にも移転できるように今後も取り組み続けたい。

派遣メンバーの学び&感想

辻田創

学ぶ側から貢献する側へ 視座が切り替わった場

参加した理由

将来、国連において気候変動・サステナビリティ分野に携わることを目標としており、その実現に向けて、データやAIを活用した専門性を高めたいと考えたことが参加の主な理由である。気候政策や国際合意が、どのような科学的根拠やデータに基づいて設計され、国際交渉の現場でどのように議論されているのかを、自身の目で確認したいと考えた。

また、各国政府や国際機関に加え、ユースを含む多様なステークホルダーが、課題意識をどのように提言へと落とし込み、合意形成に関与しているのかを理解することは、将来この分野で実務に携わる上で不可欠である。現地で多様な参加者の視点や政策案に触れることで、自身が次のキャリア段階で身につけるべき知識、スキル、国際的なネットワークという「次のピース」を明確にするため、C O Y 2 0 およびC O P 3 0 への参加を決めた。

ユースに伝えたいメッセージ

C O P は「限られた特別な人だけが参加する場」ではなく、課題意識を持ち、実際に行動するユースが国際ルール形成のプロセスに関与できる場であると強く感じた。国際交渉の現場は、事前に想像していた以上に構造が複雑であり、全会一致を前提とするため、時に意思決定が遅く、非効率に見える場面も少なくない。しかしその一方で、交渉やサイドイベントの場では、確かにユースの視点や問題提起が求められており、単なる象徴的参加にとどまっていなかったことを実感した。

また、完璧な専門知識や強い肩書きを持っていなくとも、現地で問いを立て、学び続ける姿勢を持ち、同じ志を持つ仲間と連携することで、議論の方向性や交渉の雰囲気、いわば国際交渉の「空気」に影響を与える余地があると感じた。今回の参加を通じて、ユースが主体的に関わることで、国際交渉のあり方そのものを少しずつ変えていける可能性を強く認識した。

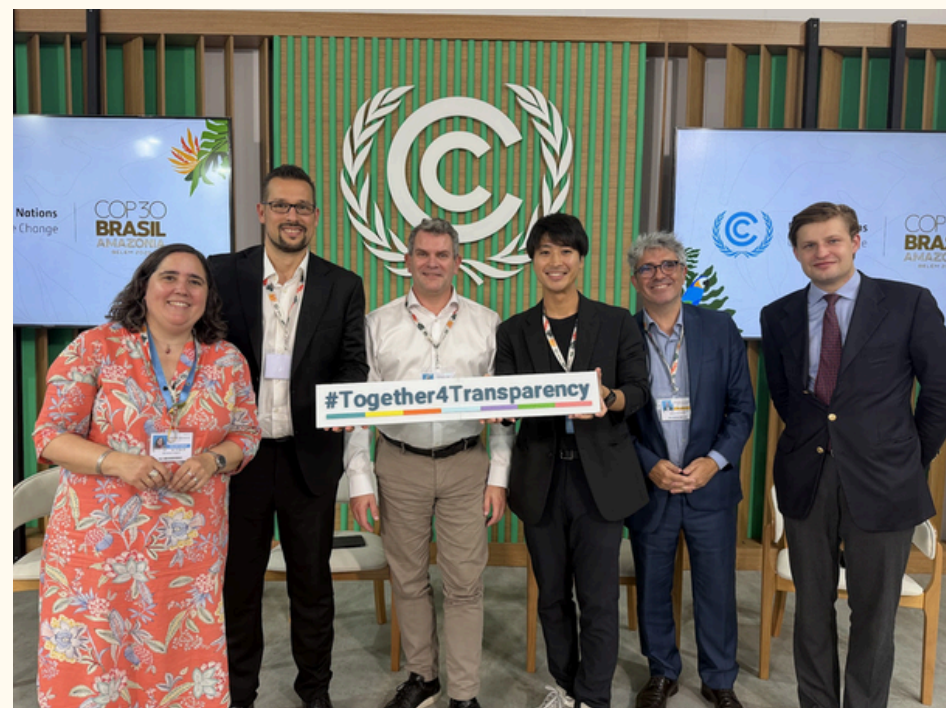
現地での活動

N D C、グローバル・ストックテイク、隔年透明性報告書、Article 6.4 など、パリ協定の実施に直結する主要な交渉セッションや公式イベントを傍聴し、国際ルール形成がどのような力学と制約の下で進められているのかを多角的に把握した。

また、Y O U N G O の戦略会合やワーキングレベルの議論に継続的に参加し、各国ユースや

国際機関関係者との意見交換を通じて、ユースの政策提言がどのように文書や合意形成のプロセスへと反映されていくのかを学んだ。

加えて、U N F C C C の Together4Transparency イニシアティブに触れ、透明性枠組みをデータとAIの力で支える取り組みに強い共感を覚えた。この経験を通じて、科学的根拠とデータに基づく専門性を国際制度の中で生かすキャリア像が明確となり、将来はU N F C C C の枠組みの中で実務に携わりたいと強く感じるようになった。この出会いは、国際交渉を「傍観する対象」ではなく、自ら関与し、支える側として関わるべき現場であると認識する決定的な契機となった。



今後の活動

C O P で得た知見や問題意識を踏まえ、まずは炭素会計に関する学習および実践を目的としたプロジェクトを立ち上げる予定である。具体的には、AIやデータ分析の手法を活用し、C Y J を含む各種団体やプロジェクトのG H G 排出量を可視化し、算定・報告・改善につながる一連のプロセスの実装に取り組む。これにより、活動の環境影響を定量的に把握し、透明性と説明責任を高める実務的基盤を構築することを目指す。

また、Y O U N G O のワーキンググループレベルで国際交渉の動向を継続的にフォローする体制を整え、特に透明性枠組み、能力構築といった専門性の高い議題を重点的に追う。単発的な参加にとどまらず、文書分析や議論の整理を通じて、ユースの立場から実効性のある知見を蓄積していく。

その上で、日本政府、民間企業、海外のユースネットワークとの連携を一層深め、政策・技術・市民社会を横断的につなぐ「橋渡し役」として行動し、次世代ユースが国際交渉や気候政策形成に参画する機会の拡大にも継続的に貢献していく。

派遣メンバーの学び&感想

井艸駿太

COPは多様なバックグラウンドを持つ若者との熟議を通じた意見形成から提言までの過程と手法をを学べる教育的価値をもつ場

参加した理由

「日本から最も遠いブラジルで、日本の意見を直接伝えたい」。これが参加を決めた理由だ。気候変動は科学、雇用、感情、倫理など多くの要素が絡み合っていて、理系の観点から見ても本質的に興味深い課題だと感じている。将来は博士課程に進んで専門性を深めるつもりでいるが、その過程で視野が狭くなってしまう不安もある。だからこそ、ユースとして広い視点を持てる今のうちに、現場で世界の議論に触れたいと思った。特に今年は日本からの参加者が極端に少なく、日本企業の出展も非常に限られていた。日本が気候変動の文脈から取り残される危機感もあり、自分の立場からできるだけ意見を示すべきだと感じた。

ユースに伝えたいメッセージ

まず言いたいのは、英語の重要性だ。日本人の考えは海外の人が驚くほど深いことが多い。激しい体験が少ない分、理屈で整理する力が高いからだと思う。しかし、伝えるスキルが不足しているため、本来出せるはずの存在感を出しきれていない。内容が高度でも、英語で表現できなければ国際交渉では「存在しない」のと同じだ。

日本のユースは、理性的に考える分、どうしても現実的で慎重な意見になりやすい。理想を掲げる他国とどう手を取り合うのかを考える必要があると思う。また、批判されても自分の理念を信じ続ける勇気を持つべきだと感じた。日本人は専門性を突き詰める力があるが、自己主張を続ける強さはまだ十分ではない。COPのように多様な人に触れ、別の価値観に感化されることがその一歩になる。

もっと多くの日本の若者がCOPに来るべきだと思う。ここでの経験は、自分の考え方も、将来の選択も大きく変えてくれる。

現地での活動

現地での主な活動は、YOUNGOとの連携だった。まずCOYで youth & finance をテーマにしたセッションを主催した。若者団体が抱える資金面の課題を共有し、ASEAN、UAE、アメリカなど多様なバックグラウンドのユースと議論する貴重な機会になった。

COP本会場では、TFFFとNbSを重点的に追うために、YOUNGOのadaptation WG と nature WG に所属した。nature WG は今年のSB62で立ち上がった新しいWGで、中心メンバーとの距離が近く、交渉プロセスを実践的に追うことができた。公式交渉だけでなく、サイドイベント、とくに大臣級が登壇する場合は内容が大きく動くことがあり、交渉を理解するうえで重要だと感じた。今年はCBD・CCDとUNFCCCのシナジーが注目され、JLG（共同毛連結グループ）の活性化など、リオ条約の横断的な議論が多く、多くの国の関心を集めていた。

YOUNGOの活動には、交渉の議事録作成（note-taking）、交渉官に面会して1対1の打ち合わせを行うbilateral、交渉でのinterventionの3つがある。加えて、特定の議題について要求を掲げるアクションも実施されていた。CYJの強みはparty overflowバッジを持っていることで、多くの交渉にアクセスできる点だ。他国のユースはobserverバッジであることが多く、この差は大きいと感じた。また、CYJは日本に帰国後も省庁と意見交換を継続できるため、交渉と国内政策をつなげる点でも優位性がある。

交渉官と話すのは最初は怖かったが、実際には多くの国の交渉官がフレンドリーだった。ある国の交渉官は、会議後に外で集まっていた私たちに気軽に声をかけ、笑顔でお菓子まで渡してくれた。気候変動という共通の課題の前では、若者・NGO・各国政府という区別を越えて協力できる可能性を強く感じた。

今後の活動

将来的には国際機関で研究職として働きたい。物理学を専門とする立場から、CERN や ITER のような国際共同プロジェクトに参加し、世界規模の課題に取り組む研究に関わりたいと思っている。気候変動に対しては、科学と社会の接点で貢献できる領域を模索したい。COPで得たネットワークは、将来の研究活動や国際協力にとって大きな土台になるはずだ。専門性を深めながらも社会課題への視点を失わないことを、自分のキャリアの軸に据えていきたい。



YOUNGO nature WGのメンバーとの交渉前ミーティングでの集合写真

田所春乃

ユースの可能性と自らの将来像を 再定義できた場

参加した理由

2年間、CYJのメンバーとして活動してきた中で、日本の政策担当者や政府関係者と関わる機会はあったが、国際的な交渉に直接関わった経験はまだなかった。そのため、実際のCOPではどのような人々が、どのようなプロセスで交渉を行っているのかを学びたいと考え、参加を決めた。また、現地での経験を通じて、今後のCYJの活動につながるような多くの方々とネットワーキングを行いたいという思いもあった。現在、エネルギー政策統括を務めているものの、外部講師や他団体とのつながりが十分ではないと感じており、そのような関係性を広げたいと考えていた。

さらに、授業でリモートセンシングを学んだことをきっかけに、この技術が気候変動対策の現場でどのように活用されているのかを実際に知りたいと思ったことも、参加理由の一つだ。

ユースに伝えたいメッセージ

第一に、希望を捨てないでほしい。私はCOPに参加する前、勉強を重ねるほどに、もはや手遅れなのではないか、自分が行動しても何も変わらないのではないかという絶望感に押しつぶされそうになっていた。

多くのシンクタンクが、オーバーシュートなしで2030年までに1.5度目標を達成することは困難であると指摘している中、今回のCOP30の交渉において化石燃料に関する明確な言及がなされなかったことは、やはり1.5度目標の達成からさらに遠ざかったように感じられた。

しかし、現地で実際に交渉の場を目の当たりにすると、一部の交渉官たちは大きな国際的潮流に左右されることなく、自らの意見を堂々と主張していた。その姿から、未来はまだ決まっていらないこと、そして問題は決して終わっていないのだということを実感した。また、年齢を問わず、心の底からこの課題を解決したいと考えている人々が数多く存在していることにも気づかされた。だからこそ、時に孤独感や絶望感を覚えることがあっても、諦めることなく、ともに学び、活動をしていきたい。

現地での活動

現地では、COP30の公式サイドイベントやJapaneseパビリオンで登壇したほか、他国のユースとの交流も行った。特に前述した二つの登壇の機会では、ビジネス界の参加者を含む多様な立場の人々が、世界的に若者の意見を政策形成に反映させる重要性に着目していることを実感した。中でも、私が投げかけた「ユースの参画をどのように促進していくべきか」という問いに対しては、多くの参加者が自身の立場や経験を踏まえて積極的に意見を述べており、分野を越えた関心の高さを感じた。

また、日本のリモートセンシング技術やその応用、そして課題について、JAXAやリモートセンシング技術センターの方々から直接お話を伺った。議論の中では、研究費の確保や長期的な研究支援の難しさといった課題が挙げられ、政策提言の中でも研究分野への言及をぜひ盛り込んでほしいという意見をいただいた。これまでのCYJの政策提言活動においては、技術開発や研究支援について十分に触れてこなかったことに気づかされ、今後の活動の方向性を考える重要なきっかけとなった。

さらに、今後のCYJの活動として計画されているImplementation部門の設置に向け、企業とのネットワーキングも行った。そのほか、closing plenaryを含む複数の交渉を見学し、各国の立場や利害の違いがどのように言葉として表れ、最終文書に反映されていくのかを間近で学ぶことができた。これらの経験を通じて、提言や発信だけでなく、実装や交渉の現場を意識した活動の重要性を強く認識した。



今後の活動

将来は国際機関で研究者として働きたいと考えていたが、今回COPに参加したことで、交渉官として働くという選択肢も新たに視野に入るようになった。

現時点では、このように将来の選択肢を広げつつ、まずは特に関心のあるリモートセンシングについて、より深く学習していきたいと考えている。また、今回構築したネットワークを活かしながら、CYJの活動もさらに充実したものにしていきたい。

北川 諒

世界と日本と自分の距離を 測ったCOP

参加した理由

UNFCCCのCOPは気候変動問題を話し合うために全世界から代表団が集う場、「世界の環境問題に関心がある」のならチャンスは逃す手はない。会場での公式・非公式の議論を通じて、脱炭素への取り組みにどのようなモメンタムがあるのか、はたまた停滞しているのかを肌身で感じたいと考えた。加えて、世界の中で日本が果たせる役割、世界から日本が何を期待されているのか、そもそも期待されていないのかどうかを知るために参加した。



マラウイ代表団の方とClosing Plenary 会場にて

ユースに伝えたいメッセージ

私たちは国内の活動の中で「将来世代に影響を被る私たちの声を聞いてくれ」と訴える場面が多い。しかし、国際的な場では「ユース」の立場とともに「日本人」であることにも向き合わされた。サウスの国から見れば我々は援助に後ろ向きな先進国の住民である。「あなたの国は私たちに何をしてくれるの」と問われ続けた。UNFCCCの制度や国際的な合意の流れを知るだけでなく、日本の取り組み・姿勢を知り、世界と日本の距離感を知ることから始めなくてはならない。私たちユースは企業・団体の「組織の論理」という盾で思考停止することは許されない。

また、「世代の論理」では現状を変えるには遅すぎる。ユースvs大人の構図ではなくて、一人の個人として急速に気候変動が進む特殊な時代をどのように考えるのか、適切な変化のスピードを探すために、課題の現場の近くに行き考える必要がある。

現地での活動

チルドレン&ユースパビリオンでの二つのトークセッションへの登壇に加えて、YOUNGOのFinance Groupに所属し、Financeに関するHigh-Level交渉、Informal Consultation等に参加し、同じYOUNGOのメンバーと交渉室に入って交渉を追いかけたり、意見交換を行った。

チルドレン&ユースパビリオンでの登壇では、サンビア出身の起業家やガンビア出身の環境活動家から、彼女らの母国の現状や取り組みを聞くことで、世界を股にかけて活動している同年代のユースから非常に刺激を受けた。加えて、北から南への資金援助だけではなく、南で推進されているエネルギーや農業分野での革新的な取り組みを北に伝え、力を合わせて協力していくことの重要性を学んだ。現地会場や会場周辺で日本の環境省・経産省の官庁の方や日本の企業関係者の方、研究者の方から直接お話を聞く機会に恵まれたこともここに記し感謝したい。

更に、韓国・中国・ドイツ・サウジアラビアのパビリオンやIEAのサイドイベントに参加することで、COPが各国の取り組みのアピール合戦の場でもあるということを身をもって体感した。当然だが、どの国も世界のスタンダード・セッターになろうと躍起になっている。翻って日本を見ると、世界の中での存在感は大きくはない。

加えて、日本が気候変動問題に世界の一員としてどのように取り組むのか、その中身もその発信の仕方も今まさに模索中であるように私の目に映った。世界の動向を伺う風見鶏ではなく「これが強みだ」と力強く発信するために、注力する分野・基軸を定めることの必要性を感じた。

今後の活動

私はこれまで、政策提言を中心に活動してきた。しかし、COP30でのチルドレン&ユースパビリオンへの登壇や他国のユースの参加者との意見交換を通じて、「気候変動問題の解決に貢献した」と胸を張って言える活動をできていない自分を恥じた。気候変動分野はインプリメンテーションの段階に移行した。私達も環境負荷低減に資する活動を現場の近くで実行して多くのセクターと共にいがいていきたいと思う。

派遣メンバーの学び&感想

安次嶺緑子

国際交渉の現場で、ユースとしての無力感を越え、変革を信じて行動し続ける意義を確信した経験

参加した理由

私がCOP30に参加した理由は、Climate Youth Negotiators Programme (CYNP)の参加者として、同プログラムで得た知見や技能が国際交渉の実践において有効に機能するかを現場で検証するためである。CYNPは、UNFCCCの制度理解、交渉技術、リーダーシップなど、国際気候交渉官に求められる能力を体系的に育成することを目的としたプログラムである。

私は今回、プログラムの初級課程であるBeginners Courseを修了し、交渉官に求められるソフトスキルを中心に学習した。そのため、現地での交渉追跡においても、交渉官がどのようにこれらのスキルを発揮しているかに特に着目した。

ユースに伝えたいメッセージ

私は約3年間、ユースとして気候変動問題に向き合ってきたが、活動の中で無力感を抱くことも多かった。しかし、COP30での経験はその認識を大きく変える契機となった。交渉はしばしば停滞し、具体的な進展が得られない場面も多かったものの、コロンビアをはじめとする数名の交渉官が「今こそ変革の時である」と力強く訴えた姿に深い感銘を受けた。時に感情を露わにしながら、未来のために誠実に発言する彼らの姿勢が国際交渉を動かす力になっていると感じた。

この経験から私がユースに伝えたいメッセージは、「難しいからといって諦めてはいけない」ということである。気候変動問題は複雑で、成果が目に見える形になるまでに長い時間を要する。しかし、粘り強く交渉を続けていけば着実に活路が見出せる。私自身、今回の参加を通じて、周囲にモチベーションを与え、共に行動する仲間を増やしていける存在になりたいと強く感じた。

現地での活動

現地での活動において、私は主に適応 (Global Goal on Adaptation) や緩和 (Mitigation Work Programme) など、主要アジェンダに関する交渉プロセスを主に観察した。交渉の場では、各国が自国の立場と利益を明確に主張し、それがしばしば南北間の価値観や優先順位の違いとして表面化した。交渉とは単なる意見交換ではなく、プレゼンターや交渉官一人ひとりの感情や信念が交錯する“有機的な空間”であることを実感した。気候変動は全人類的課題でありながら、国連の交渉の場に「全人類を直接代表する主体」が存在しないという構造的課題にも改めて気づかされた。各国は最終的に自国の利益を代表しており、将来世代や脆弱なコミュニティの視点が十分に反映されていない現状は、ユースとして強い問題意識を抱く点であった。



今後の活動

今後はまず、UNFCCCにおける意思決定プロセスのあり方を再考してみたい。前述した通り「全人類を直接代表する主体」の必要性について吟味してみたい。また、日本が国際社会の中でどのように気候変動分野でリーダーシップを発揮するべきか、国内外の状況やCYNPでの経験を踏まえて検討を深めたい。

派遣メンバーの学び&感想

富田凜太郎

責任を持つ側に足を踏み入れた実感

参加した理由

私は今回、Climate Youth Negotiator Programme (CYNP) の Beginner Course に Climate Youth Japan から富田・安次嶺の2名が参加していることもあり、その一人としてプログラムの成果を現場で検証するためCOP30に参加した。CYNPで得られたのは、あくまでも交渉官としての姿勢や物事の捉え方といった基礎であり、交渉構造を体系的に学ぶ段階ではない。だからこそ、実際の交渉の空気を感じ、自分の視点の変化を確かめる必要があった。また、科学的には“オーバーシュートなしに 1.5℃ 以下に抑えることは不可能”との分析が国連・UNEPで繰り返し示され、2025 NDC の提出も遅れが顕著となっている。行動と整合しない現状を踏まえ、CDRがどのように扱われているのかを確認することを第二の目的とした。

ユースに伝えたいメッセージ

前提だが改めて思うのは、ユースが政府にコメントする市民社会の一員として呼ばれているという点だ。CYJとしては COP 派遣を個々の成長機会や日本ユースのプレゼンス向上を目的としており、政府と関係を築くこと自体にも意味がある。むしろ適切な関係性があるからこそ意見が届きやすい場面もある。だが、だからといって政府の方針に全面的に追随するのは本質ではない。市民社会としての適切な距離感を保ち、必要なときには批判的な視点を持ち続ける姿勢が重要だと感じた。

現地での活動

会期中は主に交渉ルームに滞在し、「COP Presidency Consultation on NDC, BTRs, Art.9.1, UTM」などを中心に傍聴した。本テーマは主要議題に含まれなかったというより、そもそも議題として扱うべきかどうかを巡って各国間で意見が割れており、扱い方が揺れている論点だった。だからこそ、現場の緊張や立場の違いが最もよく表れる場であり、観察する意義が大きかった。CYNPで得たマインドセットは、各国の発言の意図や温度感を読み取る上で確かに役立った。一方で、プロセス構造の理解はまだ追う立場にあり、引き続き学習が必要だと感じた。また、CDR30 パビリオンを訪れた際には、参加企業・団体の数や議論の広がりから、CDRが確実に存在感を高めていることを実感した。ただし、ここを象徴的な熱狂と表現するのは正確ではなく、むしろ関係者自身が政策的・技術的な課題を率直に認めており、成熟度には幅がある段階だと感じた。



CDR30 パビリオンが盛況な様子。
C & Y パビリオンの目の前だったが、ユース参加者はいなかった。

今後の活動

今後 CYJ は企業連携を進めていく方針だが、私はそれとは別に、国際交渉で得た視点を日々の実務と結びつける思考を深めていきたい。現在、コンサルタントとして企業の気候変動対応の検討に携わる中で、国際交渉で積み重ねられる大きな文脈と、企業が直面する現場の意思決定や制約との間に距離を多々感じる。その両者を往復しながら理解し、納得感をもって伝えられる存在になることで、自身の専門性を磨いていきたい。更に、気候変動に対応した社会への転換には、市民、国際政治、学術、ビジネス、国内政策など多様なアクターの関与が不可欠である。その全体像を理論的に捉えるため、サステナビリティランジションをテーマに博士号取得を目指し、実務と研究の双方に継続的に取り組んでいきたい。

参考文献

【COP30の論点と結果】

• TFFF
Tropical Forest Forever Facility (TFFF) – Concept Note 3.0: An innovative financing mechanism to incentivize long-term forest conservation at scale (August 2025).
<https://tfff.earth/wp-content/uploads/2025/08/TFFF-Concept-Note-3.0-202508-FINAL.pdf>

Over USD 5.5 Billion Announced for Tropical Forest Forever Facility as 53 Countries Endorse the Historic TFFF Launch Declaration (Published Nov. 6, 2025).
<https://cop30.br/en/news-about-cop30/over-usd-5-5-billion-announced-for-tropical-forest-forever-facility-as-53-countries-endorse-the-historic-tfff-launch-declaration>

• Adaptation
Climate Adaptation at COP30: What to Expect (Published November 14, 2025).
<https://earth.org/climate-adaptation-at-cop30-what-you-need-to-know/>

• Mutirao Decision
Mutirão COP30: Global Mutirão – Uniting Humanity in a Global Mobilization against Climate Change (Draft decision by the Presidency, 18 November 2025).
https://unfccc.int/sites/default/files/resource/Mutir%C3%A3o_cop30.pdf

【派遣メンバーの学び&感想】

• 現地での活動(井艸)
The Joint Liaison Group.
<https://unfccc.int/about-us/about-the-secretariat/the-joint-liaison-group>



後半メンバーとホテルを共にした方々とホテルオーナー

謝辞・終わりに

今年のCOPはブラジルベレン開催でした。治安、感染症、地理的距離等の理由からCYJが毎年バッジをいただいている環境団体からも事前に渡航に対する注意喚起がきており、また、渡航を見送る企業も多数存在していたと聞いたため、CYJのCOP派遣事業の中でも稀に見る不確定事項の多い回になりました。そのような中でも、全員が無事に渡航を終えることができ、しかも高官が参加するサイドイベントでの登壇や、COYでの初のイベント主催、YOUNGOとの協働等、これまでのCOP事業以上の成果を残すことができました。これらはひとえに、CYJに賛同いただいている皆様のお力添えがあったこととす。この場でお礼申し上げます。今後もCYJとして若者による気候変動問題の解決に向けて尽力して参ります。

また、COP派遣において宿泊をともにしたJapan Youth Platform for Sustainability(JYPS)の藤田さん、坂本さん、フリージャーナリストの黒部さん、安全で快適な環境を提供いただいたホテルのオーナーであるアルカンタラさんに感謝申し上げます。

報告書グループ統括 井艸

編集後記

COP派遣者：
和田優希、辻田創、井艸駿太、
田所春乃、北川諒、安次嶺緑子、富田凜太郎

国内・報告書チーム：
中嶋彩香、大同唯和、櫻井琴子、勝見愛未、鈴木梢磨

表紙写真
(表)派遣メンバー前半組 プレナリーホールにて
(裏)派遣メンバー後半組 ブルーゾーン入口前で

COP30への派遣、本報告書の作成は、2025年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて行いました。





青年環境NGO
Climate Youth Japan



climateyouthjapan@gmail.com



@climateyouthjp



@climateyouthjapan



Climate Youth Japan (CYJ)



<https://www.climateyouthjp.org/>



<https://www.linkedin.com/company/climate-youth-japan/>

COP30への派遣、本報告書の作成は、
2025年度独立行政法人環境再生保全機構
地球環境基金の助成を受けて行いました。

